目次

偉人達への追随 ―― 12
塀無き檻の住民 ―― 88
オールド　メイド ―― 167
真相の欠片 ―― 217
後日談 ―― 248

教養人フェリックスの解釈『吸血鬼』

作：吉良　久允

イラスト：ポテトタコス

――今、世界中の人が見ているモノに比べれば、私の見識など如何程のものだろうか――

男の手に持っているエッセイの三ページ目はその一言から始まった。数え切れない量の本棚から見つけられたその本は、表紙に始まり、目次が書かれた、わずか紙二枚分の後に記され、おそらく機会がなければ一生縁がなかったであろう他愛のない文章だが、時と場合次第で、例えわずかでも人に影響を与えるとは書いた本人以外思わなかっただろう。

「雨って嫌いなのよ」

さぁこれからというときに、今まで彼の背後に居ながら、存在感を出さなかった店主の独り言が静かな店内に響いた。確かに外は激しくはなくともしっかりしている雨だが、それを主張する意図は彼では読めない。

「少ない客が更に減るし、洗濯物は干せない、家がカビ臭くなる、大事な商売道具が湿気って、せっかく晴れても虫干ししなきゃいけないから一日が潰れる」

やけに自己主張が激しい独り言が、お世辞にも広いと言えない店に広がる。本屋という

静寂を尊ぶ場所でわざわざ丁寧に心情を吐露しているのだから、よほど双方にとって大事なことなのか。
しかし読書を邪魔されている客からしてみれば、ただの雑音でしかなかった。
「おまけに今日最初で最後の客は、雨水まみれで店内を歩き回るし、ようやく目当ての本を見つけたと思ったら立ち読みまでする始末。彼はきっと束ねた本が意外と重いのを知らないのよ」
店主の主張がだんだん陰惨な愚痴に変わってきたが、その愚痴の原因になっている客は微動だにしない。だが無視しているわけではないようだ、彼の手が開いている本は未だ捲られていないのだから。
だが無反応は頂けない。例え聞いていたとしても相槌の一つもしなければ、無視されているとみなされて不況を買う羽目になる。
「この、土がしっかり詰まった鉢植えを時速約八十キロメートルで投げたとき、人の後頭部がどうなるのか、私は非常に興味があります」
重い物を動かしたときの独特な音が背後からした瞬間、本を強めに閉じる音がした。どうやら観念したらしい。そもそも本を買いに来ただけで、タンコブか頭蓋骨陥没を起こしかねない実験に協力する気は更々無いのだろう。

「で、私は無駄な労力を被る、と」
しばしの沈黙の後にもう一度重い音がしたのは、彼の行動が彼女の意に沿っていた証左だろう。一緒に聞こえてきた溜息がとても軽く聞こえる。
客らしく買って出て行く気になったのか、手に持っている本を棚に戻して脇に挟んでいたもう一つの本を店主の前に持っていき、カウンターの上に一枚の黄色い銀行券と一緒に置いた。頬杖をついていた店主はソレを見た瞬間、一変して呆れた顔になる。
出された銀行券は市井で出回っている、四つあるウチの一番低いものだが、古本を買うにはどう見ても、値段の幅が釣り合わないからだ。だが男と本気混じりの冗談を言える間柄の店主は、彼の意図を正確に察することが出来ていた。
「毎度毎度、ウチは両替カウンターじゃないんだけど？」
「銀行で両替すると手数料を持っていかれるんだよ」
男の一ヶ月分の給料。就職先は面倒と言い放ち高額銀行券で支払うため、小銭を作るためにわざわざ古本を買っていた。まだ銀行券が浸透しきっていない土地ではその方がなにかと便利だからだ。
そして男の言い分を聞いて店主は更に呆れた顔をした。手数料と言っても買おうとしている本よりは安いはずなのに、そのわずかでも損を取りたくないと考えているのだから、

良く言えば無駄が無いと言えど、お釣用の小銭を持って行かれる方から見れば、ケチで有難くない客だろう。
それでも店主は客の要望に可能な限り応えるために、おもむろに小銭が入っている鍵付の引き出しを開けた。几帳面な性格のようで数種類の貨幣が綺麗に納められている。その中から一番価値が低い硬貨をお釣りの分だけ数え始めた。
なぜそんな硬貨だけたくさん用意していたのか……その答えは先ほど店主が言っていた文句にある。
「君はこんなことのために時間を割くほど暇なのかな？」
「あら、特別扱いはイヤ？」
「そこに『良い意味で』が篭っててくれてたら素直に頷けたよ」
毎度毎度両替目的で来ている嫌な客には丁度いい仕返しになるのだろう。案の定男の方もしてやられたと言わんばかりに苦笑している。
「人を暇つぶしの道具に使わないでくれ」
「もう少し売り上げに貢献してくれれば考えてあげる。ほらこの雑誌、アナタ好きでしょ？もう中古だから安くしてあげるわよ？」
店主は買い取ったばかりであろう、雑誌の束から学術誌をヒラヒラと粗雑に見せつけて

きた。つい最近発行されたソレの状態は非常に良く、古本として売るにはもったいないと言えるモノだ。今男が買おうとしている本とは比べるまでもなく、著名な学者の最新の論文は読者の知識欲を存分に満たしてくれるだろう。

読みたい、買いたい、堪能したい――声に出していないが、その目が雄弁に語っている興味に、店主はお釣りの計算を頭の中で再試算を始める。

だがその甲斐もなく、男は盛大な溜息を吐いて丁重に断りをいれた。

「私はもう塩味だけのスープを飲みたくないんだ」

「あんまり学会から離れてると頭のメモが使い物にならなくなるんじゃない？　アナタの仕事じゃ鮮度は大事でしょ？」

断られてなお誘惑を試みているが、どちらかの魅力が足りないのか、男はやはり買おうとはしなかった。まだ頭のメモが使える自信があるのだろう。

ふと、仕事の話をされたからか、カウンターの横にある置時計に目が動いた。針はそろそろ一本線になろうとしている。未だ雨足が強い外では、職場へ向かう足もいつもより遅くなるかもしれない。

よほど遅刻をしたくないのだろう。それが彼の性格から来るものか、職場の規律が厳しいのか、今はまだ判断しかねるが、ずっと店の中に居ても良い進展が無いと諦める。

店の売上を増やそうとしている雌豹が目の前に居るのだから。
「なにか失礼なこと考えてない？」
男の心情が盛大に漏れていたらしく、店主がまたも呆れた顔で頬杖をつく。
「あまり人の前で考え事しないほうがいいわ。アナタ顔に出やすいから」
言いながら束ねた十数本の硬貨をカウンターに置く。本当にしっかり数えたのかと疑わしくなる量なのだが、男の方も店主を信用しているようで、確かめもせず零さないよう革の袋に収めていく。
「たまには古い物じゃなくて、ちゃんとした店で買ったら？　読み終わったらウチに売ればいいんだし」
「買い取り金額が十分の一にならなければそうしたよ」
ジャラジャラと音を鳴らす硬貨を収めている間、彼女は手放した商品を興味なさげに紙袋で包装した。
「それと自分が扱っていた商品を『こんな物』扱いは止したほうがいい。少なくとも私は、この本がこの店にあったことを感謝しているよ。私に必要な物なんだから」
「誰に向けた感謝なのかしらね」
それはもちろん――外へ出たときに紙袋が濡れないよう、コートの内側にしっかり入れ、

「この店を開いてくれた君にだよ」
そう言って目深に帽子を被り、来店した時より強くなった雨空の下へ出て行った。

偉人達への追随

雨が降る市街を歩く人はまばらだが、時折走る自動車と多くの馬車は客を乗せながらゆっくり泥を跳ねていた。時刻は夕方、すでに多くの店から電灯の光は消え、各々が帰路についている様子が伺える。

雨雲で覆われた空ではあるが、乱立する集合住宅の窓から漏れる生活の光は一層映え、街路に設置されたガス灯と相まり、町中が普段以上の煌きを見せていた。その文明を象徴するイルミネーションである。

しかし天気は雨、野外で芸術を堪能するには最悪のコンディションであり、多くの者は水に濡れた衣服に軽い嫌悪を抱きながら、次の目的地に向けて重い足を動かしていた。間を置かず次々と建物に入っていく様は、誘蛾灯に誘われる虫のようではあるが、玄関の光は暖かく彼等を迎えている。

その十把一絡げの中に、傘も差さず走る者がいた。元は茶色のオーバーコートは余すところなく湿潤して、濃く変色するほどだから相当長く雨に打たれていたのだろう。それで

も懐に抱えているモノを濡らしたくないのか、水たまりに勢いよく足を踏み入れようと、そのとき水が跳ねて周りの通行人の顔がしかめようと、雨水泥水まみれの足は目的地に着くまで機械的に前進を続けた。

彼もやがて目的地にたどり着く。しっかりしたコンクリート造りでも少し古臭さを感じるが、その堅固な建物は数十年の雨風を防げると証明している。

そして内装も歴史を感じさせるほど色あせた物が多い。くすみが浮かぶランプの列に凝り固まって色落ちした絨毯は、長い年月を過ごした証左であった。

その歴史ある廊下と階段に泥と雨水の足跡を着けながら。

「で、これの中は？」

わずかな灯りを頼りに冷雨の中を走り、就労場所であるコンドミニアムの一室についたときにはずぶ濡れであった。それでも本を死守した来訪者に対して、家主兼雇い主兼教え子が最初にしたことはタオルを渡す――ではなく、逆に彼から茶封筒を奪うことだった。

「君ねぇ……もう少し思いやりとか優しさというものを……」

「イヤだわ、数少ない荷物でも持ってあげようっていう心遣いは理解してもらえないの？」

ねぇフェリックス先生――ああ言えばこう言うのがクセになりつつある教え子に、フェリックスと呼ばれた男は、毎度のことと知っていてもため息を吐いた。相手の主張を意に

沿わない形に変える行為は、時と場合では相手の神経を逆なでしてトラブルの元であり、例え親しい間柄であっても控えるべきだと考えるのがフェリックスの主張なのだが。
「自分に都合がいい主張を押し通そうとするのは自然なことでしょ？」
これである。可愛くない生徒というのはこういうものモノなのかと、この教師は日々実感していた。
「ん～……吸血鬼の伝承？　なんでこんな本……しかも古！　初版が十年前じゃない」
「あまり粗雑に扱わないでほしいね。私が手に入れられる資料は、今の所ソレだけなんだから」
主に金銭的な意味で――そんな冗句を言いかけて止めた。現在フェリックスが収入を得る方法は、彼女を相手にした家庭教師しか無く、当然給与も彼女から出る。なのに金銭的困窮をほのめかせば、彼女の不機嫌がどんな形で身に降りかかることか。
「私は民俗学を依頼した覚えはないんだけど？」
冗句を言わなくても不機嫌になったのは彼にとっても予想外だったかもしれない。
「ソレはただの私物だよ。君の授業には何の関係もない」
「じゃあいつもの浪費癖？　そういうことはもう少し稼いでからやったら？」
フェリックスは教え子の盛大なため息と忠告に苦笑した。金銭に困らない者から見たら

無駄な買い物に見えるようだが、彼にしてみれば本業だからこその出費……必要経費であり、彼女の言う『もう少し稼ぐ』ためのプロセスに過ぎない。それなりの付き合いがありながら理解を示してもらえないことは、フェリックスにとって残念なのだろう。
「もう十分も過ぎてるんだから、早く体を乾かしてね。詳しい事は後で聞くから」
人の背丈ほどもある高級そうな置時計の針は、確かに授業の時間を過ぎていた。しかし全身ずぶ濡れの様相通り、彼の手持ちのハンカチですら雨水で使い物にならず、他に拭く物を与えられない身の上では、暖炉の熱だけで乾かすにもそれなりの時間がかかるだろう。
「じゃあなにか拭くものを――」
「水浸しの泥まみれになったカーペットとバスローブのクリーニング代は気にしなくていいから」
これに免じて――手に持った本をヒラヒラと揺らしてフェリックスの催促を躱し、流れるような薄金髪を持つ娘はそのまま身を翻して奥の部屋に消えた。
遅刻した代償にしては嫌味ったらしい――大きくため息を吐く彼が彼女の後を追えたのは、自らバスルームへ赴いてタオルとバスローブを着用したあと、
「ねぇ、寒いからお茶淹れてくれる？　棚のハニージンジャー、使い切りたいの」
追加注文を承った十数分後であった。

豪華な調度品が揃えられた部屋である。入って最初に目につく室内の半分を占領するダークブラウンのデスクと本棚には、表面は綺麗に艶光していながら、所々に見える小さな傷が良いアクセントになって一層渋みが増している。収められている本もデスクの上に飾られているランプも年季が入っており、静かな時間を過ごすために作られたであろうその部屋は、一つの理想が表現されていた。

雨音とペンを走らせる音。邪魔にならない雑音――アンビエント――は静寂よりも心を落ち着かせ、紅茶を飲みながら本を読むフェリックスにとって、この上ない至福の時間であった。

「どうして今頃あんな本に手を出したの？　吸血鬼ブームなんてとっくに終わってるでしょ？」

余裕の表れなのだろうか。先日の復習と称して公式問題をいくつか解いている途中で、彼女は雑談を申し出てきた。それがいつものことだと言う風に、フェリックスも解答の進展具合を疑いもせず話を続ける。

「去年のバルカン半島の戦争は知ってるね？」

「新聞に載ってる限りなら。もうすぐロンドンで調印式でしょ？」

オスマン帝国を中心にした東南ヨーロッパの戦争。彼女の言う通り、周辺各国の独立運

動や領土問題により安定しない情勢を強いられている。当事国だけではなく、さらにその周辺の国も援助し、もはや泥沼と化していた。
その終焉の間近を喜ぶ声は大きいのだが……。
「で、その無駄遣い事業がどう関係してるの？」
「無駄……君にとってはそうなのかもなぁ……」
人が戦い、死ぬことを無駄と断言したことに若干落胆を覚えるも、やはりフェリックスは彼女を改めようとはしなかった。それこそ彼にとって無駄だからだ。
「君と同じで、私も新聞を読んでいるんだが」
「拾い読みでしょ？　私はちゃんと購読してる」
「君と違って私は新聞を拾い読みしているんだが、その半島のこととは別に、コラムで難民の動向が書かれていたんだ」
難民――戦争が起きれば人の行動は概ね三つに分かれる。戦う者、留まる者、そして逃げる者。祖国を離れるという大きな決断を下した彼等だが、当然ながら誰にも良い顔はされない。戦う者は臆病者と罵り、他国の者は厄介なオニモツが来たと蔑む。それ以外の選択肢など無いと理解されずに、レッテルを貼られてしまうのは仕方のないことかもしれないが。

「その記事によると、彼等の行き先が今までとは違い、オーストリア方面に集中しているそうだ。元々あの辺りの難民の経路はそう多くないが、ルーマニアを超えた先にも難民を受け入れている国はある。どうして今回に限りそうなったのか」
「難民だってバカじゃないわ。『猫跨ぎの国ルーマニア』は、その筋じゃ有名でしょ？」
「この場で議論しても憶測にしかならないよ。だが一つの事実として、その新聞のコラムに載っていたのが」
これだ――読んでいた本の半ば辺りを開いて見せた。そこにはトランシルヴァニアと吸血鬼伝承の関連と経緯が書かれている。
「ルーマニアで吸血鬼が出たって言いたいの？　バカバカしい。先生が質の悪い噂話に興味があったなんて意外だったわ」
走らせていたペンを少しだけ止め、流し目で数行読んだだけで、バッサリと切り捨て作業を再開した。
吸血鬼を題材にした、とある小説が話題になったことをきっかけに、ルーマニアがその発祥のように扱われるようになって久しく、その新聞のコラムのように、話題性にあやかって金銭を得る者も当然出てくる。
多くの人が彼女と同じであるように、幻想生物の存在を信じている者は多くない。

「本物かどうかはともかく、現地では実際人が死んでいる。吸血鬼を連想させる死に方で……シャーロット君、私はコレを調べに行こうと思う」
今度こそ踊っていたペンが休んだ。くぐもった雨音だけが静かに囁く小さな一室で、先ほどとは打って変わった重たい空気が漂う。
コトンと万年筆をペンケースの中に収め、シャーロットは手を机の上で組んだ。
「フェリックス先生、私達の相互契約では定期的な教鞭とその報酬。それを自ら破ると？」
「現地の状況次第だが概ね一ヶ月の滞在予定だ。その分の宿題を置いていくよ」
「それがどれだけ無駄なことか、今ここで証明しましょうか？」
机に置いていた数枚の紙をヒラヒラと揺らして見せる。最後の紙は途中で止まっているが、彼女の自信が偽りでなければ、全ての問題を正解するだろう。一度習ったことを反復するだけの単純な作業は、彼女にとって無駄と言い切るに値する退屈な行為らしい。
「仮にわからない問題があったら、その答えがわかるまで一月もかかるのよ？　そんな無駄は耐えられないわ」
『時間を無駄にしなければ有意義に生きられる』のかな？」
「先生」
まともに取り合ってくれないと感じたのか、シャーロットは語気を強めて改めようとす

るが、時間の使い方が下手な教え子にフェリックスは笑って見せた。
　生来の気質か育ち方なのか、彼女はとにかく成果がある行動を取りたがる。多くの者がそういうものかもしれないが、彼女は度を越して顕著に。
　だからフェリックスは彼女に好感をもっていた。生徒として教えるに足る、欠けた部分がある故に。
「君との契約は重々承知しているとも。学校に通いながら家庭教師まで取る、君の熱心と見事に消化する秀才は本当に敬服している」
「それなら――」
「だが先達として言わせてもらえば、参考書やカリキュラムの消化を繰り返すだけで終わる一日が有意義かどうか。私が教えていることも学校で受けた授業の延長や繰り返しに過ぎない」
　それなら――椅子から立ち上がり、答案用紙を優しく取り上げて机の上に本と共に並べた。
「大勢の探究者達があるかどうかもわからないコトを探しに旅出た、その勇気に追随する意味に興味を持つのもいい。それが目の前にある」
「……先生の前に、でしょ？」

シャーロットはデスクに誂えた大き目の椅子にギシリと深く背を持たせた。それぞれにとって都合がいい主張を出し切って、どちらを取るのか。彼女の青い目はフェリックスの顔と本を交互に写し、やがて小さなため息を吐いた。
「休んでる間の給金は認めないから、そのつもりで」
「結構。私もそこまで図々しくない」
そう……じゃあ――前かがみになるよう起き上がったシャーロットは机の上で白い指を組み、その上に細い顎を乗せた。その顔は何故か妙に楽しそうで、本来なら綺麗な笑みと取れるはずなのだが、フェリックスにとって良い思い出が無い、イヤらしいホホエミだ。
「普段からギリギリの生活を送ってる人が、一月分の旅費をどう工面するつもりなのか言ってもらえる？」
そして例に漏れず、フェリックスの予感が当たりつつある。
「……君にその情報は必要だろうか？」
「あら、生活困窮者が旅行をするだけの金銭をわずかな時間で得るのよ？　これは経済学に充分貢献できるテーマじゃないかしらん」
需要はありそうなテーマである。当然そんな方法があるならフェリックスが金銭に困ることはないだろう。そうではないということは、そういうことだ。

「ルーマニアへ向かう鉄道で日雇いをしながら。現地でも探せば何かあるさ」
教養を持っていながら知識の方はいまいち偏りが見受けられるこの男は、戦争域に接している国の、それも難民が雪崩れ込んでいる所で、簡単な仕事が見つかると思っているようだ。
懸念は他にもあるが、一番の問題は別にある。
「ここスイスなんだけど？」
スイスとルーマニア。直線距離にして約千キロメートルも離れており、地形や都市に影響される鉄道ならさらに長くなる距離である。鉄道が普及して久しく、陸上での移動が飛躍的に容易くなったものの、これほど超長距離を渡るには、よほど金銭と時間を持て余している者でなければできないことだろう。
「往復する時間だけで半月取られるんじゃないの？」
「昔と比べて機関車も改装されて早くなってるから、そうでもないさ。まあ、なんとかするよ」
なんとかなる――と言わないだけマシなのだろうか。どちらにしても、この段取りの悪さにシャーロットは嘆いて顔を斜めに傾ける。
「そこでお金を貸してって言わないのは評価するけど……」

「立場や信用を利用するほどのことじゃない。さぁ、無駄話はこれでお終いだ。授業を続けよう」
フェリックスは話を打ち切り、手に持っていた本を参考書に換えて授業の用意に取り掛かり、シャーロットも渋々筆記用具を改める。一月の休みを受理した以上、彼のスケジュールに干渉する義理も義務も、彼女にはないのだから。
ただ、手持無沙汰気味にペンを揺らしながら物思いに耽っている彼女の心情は、集中して講釈を垂れるフェリックスでは察することができなかった。

世界で最も、鉄道に力を入れた国の一つに数えられるスイス。十九世紀半ばに創設されたチューリッヒ駅を主軸に、多くの私鉄会社が我先にと路線拡大を進め、比例して利用する旅客も多くなった。多くは国内の移動に使うが、旅行目的で国外へ赴く者も少なからずいる。一度に大量の荷を運べる恩恵は物だけに留まらなかった。
「おい新入り、ここの荷物を三号列車に運んどけ！」
「はい、ただいま！」
旅行で欠かせないのが荷物である。流通と交通の要となった鉄道駅だが、衣服類は思う以上に嵩張り、ソレを運ぶには人以外の力が必要だったため、バスや車、まだ主流であり

要の馬車が多く停留する場でもあった。
当然ソレ等を積み下ろしする人手も必要になるのは自明の理である。裕福な者が自分の手を煩わせない方法を最大限活用するのは、どの時代でも同じらしい。
「新入り、ちょっといいか？」
プラットホームを行き来している途中で責任者に呼ばれて、慣れない仕事に息も絶え絶えのフェリックスは手を止めて汗をぬぐう。
「お前確か、普段は家庭教師してるっつったな？　語学はどのくらいできる？」
「ラテン語を中心に主要国の言葉を。ヨーロッパ圏の言葉はコレを元にした言語が多くて歴史上の文献からも――」
「じゃあヨーロッパならどこでもいいんだな？　通訳の仕事が入ったんだが、やってみねぇか？　荷物持ちやらいろいろやってもらうが、金は弾むらしいぞ？」
通常、通訳は隣国に近い所で雇うのが常である。しかし情報のやり取りが簡便になり、また比較的裕福ではない者でも教育が施されるようになって、現地に詳しいことと信用の証明さえあれば誰にでも出来る仕事であった。
それ以上に、フェリックスにとって慣れた仕事で金銭を得られるなら、願ってもないことのはず……が。

「申し訳ありませんが、お断りさせていただきます」
「……おいおい、金がいるって言ってたじゃねぇか。せっかく実入りが良さそうなモン持って来てやったんだぞ？」
「ソレには感謝していますが……主任、『誰に』言われて、その話を持ってきたんですか？」
断ってなお食い下がろうとする姿に疑心が沸いたフェリックスは、肝心の雇い主に関する情報を堀出そうとする。
普通に考えればおかしいと気づくだろう。入ったばかりでロクに信用もない日雇いに、大事な客に付きっ切りになる通訳の仕事を与えることが、どんなにリスクある行動であるか。
「ジュノーさん、もういいわ。その人、誤魔化しとかすぐ見つけちゃうから」
その答えになる人物が、主任であるジュノーの後ろから声をかけてきた。鍔が広い帽子に簡素な婦人服、そして貝殻や宝石のアクセサリーで着飾ったシャーロットだ。ジュノーの肩越しに彼女を認めたフェリックスは、案の定という顔で軽いため息を吐く。
「私的運用は不評を買うぞ、フロイライン」
「実家にはちゃんと了承を取ってるので御心配無用ですわ、レーラー」
かつて鉄道の数が少なく、旅行者が個人で切符や宿泊先等の手続きをしていた頃、その

全てを代理で行う事業に成功したイギリス人がいた。のちに自国のみならず近隣諸国へ版図を広げる旅行代理店がある。シャーロットは勉学のためにスイスへ留学しているが、その会社とは深い関係にあった。
「この会社に君の御実家の名前は入ってなかったんだが？」
「なんで私がここに来たと思ってるの？　地元の企業と提携したのよ。何もかもウチで準備してらんないじゃない？」
その通りだと言わんばかりに、フェリックスは苦虫を潰したような顔をした。ジュノーと面識があったのも、その辺りが起因しているのだろう。
「で、君がここにいる理由は？」
「この時期に東欧へ行こうとする奇特な方のためのルート開拓と、それとツアー用の観光スポットの下見に、現地に支店を建てられそうな物件があったらリストアップしておこうと思って」
予定を書いた手帳をペラペラとめくる。
「学校は？」
「どの学校もお金に困ってるみたいよ？」
立派な賄賂である。しかしそれがまかり通るのが金の持つ力であり、上手に付き合える

人間にとって万策の手段となる。学問が金に負けたことを嘆きつつも、自分には関係ないことだとフェリックスは割り切った。
「じゃ、私からもう一回質問。旅費は全部こっちが持つわ。贅沢はさせてあげないけど、雑費ぐらい出すわよ？」
どう？――手帳に折りたたんで挟んでいた紙を開いて見せた。会社の名前とシャーロットのサインが記入済みの、雇用に関する手書きの契約書だ。荷物運びに通訳、旅行中のルーマニア語の教鞭に、可能な範囲でのボディーガードとその他雑用等々、思いつく限りの仕事を詰め込んだ内容に、フェリックスは呆れて物も言えなかった。
「奴隷契約か何かかね？」
「大仕事を控えた教え子の可愛いお願いじゃない。お給金は言い値でいいわ」
そう言ってシャーロットはいつも使っているお気に入りのペンをフェリックスに渡した。
何故もうやることが決定しているのか、何故ここまで用意周到なのか、本気でこの内容で契約しなければならないのか。色々言いたいことを溜息に変え、給金の数字と自分の名前を書いて契約書とペンを返した。
「だから、先生が好きよ」
後付けされた給与欄の数字を見て、シャーロットは満足げに、朗らかに微笑んだ。